

会 議 記 録

会議名称		第4回（仮称）コミュニティふらっと本天沼の運営に関する地域懇談会
日時		令和6年3月18日（月） 午前10時00分 から 午後0時10分
場所		消費者センター 第1・2教室
出席者	委員名	本天沼区民集会所利用者：塩谷委員、曾山委員 天沼区民集会所利用者：佐藤委員（代理出席）、平委員（代理出席） ゆうゆう天沼館利用者：池川委員、本間委員 荻窪地域区民センター協議会：杉浦委員 天沼青少年育成委員会：豊川委員（代理出席）
	オブザーバー	コミュニティふらっと本天沼運営事業者：安住氏
	事務局職員	地域施設担当課長、荻窪地域担当副参事、荻窪地域活動係長、地域施設係長、コミュニティふらっと整備担当係長、コミュニティふらっと整備担当主査、地域施設係職員1名、高齢者施策課いきがい活動支援係職員2名
傍聴者数		(有) 8名 無
配布資料	事前	なし
	当日	・次第 ・コミュニティふらっと本天沼 利用シミュレーション案 ・多世代交流の場所として必要な取組 ・避難経路図
会議次第	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会のあいさつ 2 利用シミュレーション結果について 3 テーマ③多世代交流の場所として必要な取組 4 各委員からの意見・議論 5 今後のスケジュールについて 6 閉会のあいさつ 	
その他	なし	

1. 開会の挨拶

地域施設担当課長から挨拶

2. 利用シミュレーション結果について

事務局から資料を基に説明

(質疑応答)

- 健康麻雀の団体は、ゆうゆう館では4時間で活動していた。午後①の2時間45分では活動が途切れてしまう。午後②が確実にとれる保証はないので、午後①・②をまとめてとれる仕組みを作ってほしい。

ゆうゆう館から移行してくる高齢者団体がほとんどであるのに、なぜ集会施設の予約枠に合わせる必要があるのか。システムだけの話ならば、予約枠の変更は簡単なことではないか。

高齢者施策課からは、今まで通り活動できるものだと説明を受けてきた。

⇒事務局：現時点でのゆうゆう天沼館の利用傾向を踏まえると、健康麻雀団体の活動日の午後②を希望している団体はいない。

- 午後①・②を抽選の段階で確保しておくことはできないのか。

⇒事務局：抽選申込できるのは上限4枠であるため、月4回（毎週）活動しようと思うと午後①・午後②をまとめて事前に確保することができない。高齢者団体は、12時～15時の間に活動している団体がほとんどであると認識しており、15時以降まで利用している団体は少なかった。

- 自分の団体の活動は麻雀ではないが、能の仕舞をはじめ、色々な活動を午後の枠の中で時間を区切ってやっていた。15時以降に活動している団体が少ないというのは認識が甘いと思う。

- 後半の時間まで利用している団体が少ないというのは、主観である。全ての団体に聞き取りをしたのか。しっかりとエビデンスに基づいて説明してほしい。

⇒事務局：個別の聞き取りまではできていなかったが、2月20日のゆうゆう天沼館の抽選会の場では説明させていただいた。

- あの時、自分が午後枠の時間が分割されるという話をしていなかったら、高齢者団体は気が付かなかったと思う。

⇒事務局：空き枠のタイミングで、予約が競合するのはあくまでゆうゆう館の利用者である。

• 高齢者団体の中でも、希望が重複する可能性がある。自分たちは麻雀を1試合（半荘）1時間10分でやっている。今あるシステムに高齢者団体が合わせるのではなく、今あるシステムを、高齢者が溶け込める形に修正していくべきである。

• 抽選申込できる上限を増やすことはできないのか。

⇒事務局：現在のコミュニティふらっとの運用では抽選で4枠、空き枠で4枠を上限と定めている。

• 条例等で定めがあるのであれば、それを変えることもできるのではないか。

⇒事務局：開設してから、どうしても施設の運用がうまくいかないということであれば、見直す可能性もある。開設してから検討するという形ではいかがか。

• 問題が起こることがわかっているのだから、事前に実施すべき。

⇒事務局：既存のコミュニティふらっとにも関係してくる話である。本天沼だけ別の運用ができるのかも検討しなければならない。

• ゆうゆう天沼館では既に抽選を実施している。施設によって状況は異なる。その中でどのような対策ができるか考えていく必要がある。

⇒事務局：ご意見をいただいたことは記録する。

⇒オブザーバー：

委員がご所属の団体としての希望はおっしゃるとおりではあるが、今後高齢者人口が増えていく中で、運営側としては登録団体数を増やし、利用率を上げていきたいと考えている。移行のタイミングではシミュレーションで示されている形での利用ができたとしても、時間が経って高齢者団体の数が増えれば、将来的には抽選になるはずである。その中で永続的に同じ枠を使えるというような、既得権益につながる制度はつくることできないと思う。

• 既存の施設を円滑に移すことが目的なのに、それを区がやろうとしていないのでは。

⇒事務局：当初設定した枠をそのまま変えない、という風には考えていない。使われ方を注視していく必要がある。

- ・高齢者団体優先枠は1か月で8枠までとることができるということだが、抽選でも空き枠でもさざんかねっとよりも優先されているということか。

⇒事務局：ご指摘のとおりである。補足だが、第1集会室と多目的室には高齢者団体優先枠はふらない予定である。

高齢者団体の利用については、運営事業者にも協力いただいて、可能な限りゆうゆう館での活動と同じ曜日、時間帯で利用してもらいたい。各団体の希望を聞いて調整もしていけると思っている。

- ・今言ってもらったように、話し合いをしながら利用枠を決めていただきたい。

- ・さざんかねっとは3カ月前から予約できないのか。

⇒事務局：コミュニティふらっとにはホームグラウンド団体という制度がある。ホームグラウンド団体になった場合は、3か月前の15日から予約をとることができる。それよりも先に高齢者団体が予約できるため、高齢者団体以外との競合は起こらない。

- ・受託事業者として調整は可能なのか。

⇒オブザーバー：

完全に約束はできないが、ゆうゆう館に比べてコミュニティふらっとは部屋数が多いので、調整しやすくはなると思う。

- ・団体毎に色々な希望がある。抽選をする前にコミュニケーションをとって、譲ることができない団体のなかで抽選をするという形は理解できる。

3. 多世代交流の場所として必要な取組

事務局から資料を基に説明

- ・説明があった既存コミュニティふらっとの事例について、いつ実施しているかわからないものがある。年に2回しかイベントを実施しないという姿勢は変わらないのか。日常的に施設を利用してほしいのか、単発な利用で良いのか、区がどのように考えているのか明らかにしてほしい。

⇒オブザーバー：

コミュニティふらっとで多世代を無理矢理交流させるという風には考えていない。あくまで施設はコミュニティづくりの土壌であり、イベントは施設を利用してもらうきっかけと捉えている。イベントには同世代が連れ添ってくるのがほとんどであるが、同じ場で過ごすことで顔見知りになるくらいの交流はできる。「地域の

人が出会える場所」という位置づけでイベントをしている。その先に自主事業がある。自主事業でも、異なる世代が全く同じ内容で活動できるわけではないが、顔見知りになることはできる。

天沼地域の小学生の「私たちの天沼」の発表を見に行った時に、6年生が天沼についての歴史など、高齢者の話を聞きたいと言っていた。そのような子どもたちにコミュニティふらっと本天沼を活用してもらえると良いと思っている。

多世代交流はゴールが決まっているのではなく、気が付いたらつながりができていた、というようなものだと思う。それは災害時、非常時の助け合いにもつながる。

⇒事務局：都市部では地域の間関係が希薄になっているのが課題である。区の施設を利用して趣味の活動をする自主グループによる交流は一定程度進んできている。コミュニティふらっとではイベントや自主事業など、様々な機会をとおして、利用者同士が顔見知りになり、交流が自然に広がっていくとよい。

4. 各委員からの意見・議論

- 天沼青少年育成委員として活動している。本天沼区民集会所は、育成委員会の役員会・総会等で利用していた。また、小・中学生向けのイベントも実施してきた。コミュニティふらっと本天沼は、たくさん人が集まると混雑するのではないかと思う。

近所のコミュニティふらっと東原は子どもの利用者が多いが、本天沼区民集会所は集会施設であったので、どのように子どもを呼び込むかが課題と考える。

- 荻窪地域区民センター協議会で活動している。センター祭りを年1回、その他イベントを3回実施しているが、子ども向けのイベントを実施したときは、若い人の声が聞こえるとありがたい、という感想が多く聞かれた。また、高校生のボランティアに来てもらったときは、高齢者にとっては高校生と出会い、会話するチャンスがあること自体が嬉しい、という声もあった。

非常事態のときに声をかけ合える顔見知りをつくる取組を引き続きやっていきたい。コミュニティふらっと本天沼でも、協議会のイベント開催したいと思っている。

- 「私たちの天沼」に保護者として参加した。天沼という地域に大切にされている、と感じている子どもがいたのが嬉しかった。杉並区内には家庭環境が困難な状況である子どもが1割程度いるという調査が出ているが、定期的に子ども食堂やフードパントリーを実施しており、子育て応援券の事業者でもあるので、子ども、お母さん向けの交流の場を設けたいと思った。

また、百人一首の団体でも活動しているが、テーブルカルタという世代を問わず参加できる大会を開催した。このような活動もコミふら等で出来たらいいと思っ

ている。

- 近所には特別養護老人ホーム、子ども子育てプラザ、天沼小学校など様々な施設があるため、それら施設の人たちとどのように交流できるか考えられるとよい。それとともに、近隣の施設をどのように活用できるかも考えていくべきである。

- コミュニティふらっとと一括りに言っても、施設毎に違いがある。コミュニティふらっと東原のように多くの子どもに来てもらえるよう、本天沼でも工夫する必要がある。利用するにも予約・お金が必要であるため、子どもが来ることの妨げにならないか心配している。

コミュニティふらっと東原では乳幼児の健康診断もしているが、全館土足である本天沼で同じことが可能か。

- 第二回懇談会の際、子ども向けの学習支援について提案したが、「学習支援については専門職に任せるべき、天沼には富裕層が多いから支援は不要」などとして却下されたと記憶している。

区が継続した多世代交流を進めていきたいのであれば、防災の視点は大切である。防災トイレの使い方、防災食の食べ方、テントの張り方、井戸水の飲み方など、いざという時に備えて他の世代に伝えるのが必要。学習支援も然り、これからの世代がありがたい、と思えることをしていくことが大切。

- コミふらのイメージはまだ掴めていないが、施設にどのような利用価値があるのか、利用する側としても考えなければいけない。子どもが集まる要素はコミュニティふらっと東原のような場所にあるが、本天沼をどうしていくか。子どもに継続して遊んでもらえる、集う場所を作っていく必要がある。人が集まる場所として活性化させなければいけない。都会は地域として集うのが難しい傾向がある。

福島では、道の駅で子どもマルシェをやっていて、たくさんの方が来ていた。東京でも色々と工夫しなければいけない。地域的なつながりをつくるのは、行政ももちろんだが住んでいる人も取り組んでいかなければならない。本天沼の多目的室は比較的広いので、例えば合唱団がミニコンサートを、百人一首の団体が大会を、麻雀団体が体験会を実施するなど、利用している団体が人を呼び込む企画をしても良いと思う。

- 大学でミュージカル、オペラなど舞台芸術を教えている。コミふら本天沼の多目的室には、防音装置、姿見はあるのか改めて確認したい。土足の話も出たが、演劇などの観点から見ると、多目的室は土足禁止にしてほしい。

また、川柳の団体でも活動しており、コミュニティふらっと本天沼では若者にも参

加してもらい、異世代交流をしていきたいと考えている。

コミュニティふらっと本天沼にはゆうゆう館の機能移転をするとのことだが、優先枠は部屋毎ではなく使用目的で決められないか。演劇等で使用する場合は、求められる部屋の機能が単なる会議室等と異なる。下足で活動できる団体や、防音の部屋でなくても活動できる団体が多目的室を使うという状況は避けられると良い。

⇒事務局：利用種目にフレキシブルに対応するという点は、施設の利用促進という観点でも課題であると認識している。

多目的室は、一定の音の出る活動ができるように防音対応をしており、鏡も設置する。ただし、あくまで「多目的」に使える部屋のため、集会や講座で使用する想定もある点、下足の管理や安全性を考えると、土足禁止とすることは現時点では考えていない。靴を脱いで使用する場合は、活動の前に清掃するなどしていただきたい。

- 全ての部屋を統一したルールで縛るのではなく、使用目的を考慮してほしい。
- 使用目的を中心に考えるのはとてもいいことだ。靴を脱がないとできない活動もある。土足を前提として掃除をするのは、職員さんの手間にもなる。
- 土足と鏡の件だが、コミュニティふらっと阿佐谷は第1・2集会室は土足禁止である。コミュニティふらっと本天沼でも同じ運用にすることは可能ではないか。
- 以前、折りたたみの畳の設置を要望した。多目的室の隣に倉庫があるが、畳をそこに置くようにすれば土足の話も解決するし、赤ちゃん連れにとっても良いのではないか。百人一首の団体としても、多目的室は土足禁止の方が畳が敷きやすくてありがたい。

⇒事務局：畳は廊下から出し入れできる場所に置きたいと考えている。

- 能の仕舞をしているので足袋を履くので土足禁止だとありがたい。ゆうゆう館では発表会をやっているので、コミふらでも機会があれば出たいと思っている。発表会などをする場合は、多目的室の左側が舞台になると思うので、ラウンジの方に抜けて出られるとよい。うまく活用できるように、ハードの面も工夫してもらえないか。
- 工事は進んでいると思うが、ハード面の設計変更はまだ可能なのか。

⇒事務局：運用面の対応は可能であるとする。

多目的室の運用については検討の上結果を回答する。

音の出る利用種目に関して、利用可能な部屋が少ないという話が出ている。

一方で、防音の部屋を設置するには近隣への配慮も必要である。集会施設の利用促進を考える上でも、大きなテーマであると認識している。

- 現状、区内には声を出ることができる施設がほとんどないため、杉並以外で活動している。フレキシブルに部屋を使えないと、活動ができない団体が出てくる。

- 災害の面を考えても、地域がどのようなものかは、行政と住民が一緒に考えていかなければならない。区として施設のコンセプトを磨いていくべき。

施設としてやるが増えると運営する側はお金がかかって大変である。公的なお金を出し、事業者をサポートすることは続けていただきたい。

施設の機能が複数あると、既存のまま利用するには限界があり、いずれは改築をしなければならないと思う。運営に問題があるならば、お金をかけてでも施設を変えていくべき。

- 阿佐谷駅近くでゆうやけ市（フリーマーケット）を実施している。毎月実施するのは大変だが、町会毎に役割分担すれば、その場所に皆が集まるようになって、やりたいことがたくさん出てくる。

広場でやるのがいいと思うが、雨の日に備えて施設内にも場所を用意するとよい。

- 資料8ページにあるボランティア団体 ROPE は児童館から生まれた団体である。

コミュニティふらっとだけではすべての交流をすることはできない。地域の色々な団体や施設とネットワークを組んでいかないといけない。つなぎ合わせることも、受託事業者だけでは難しいので、区が主導すべきである。特に、フェニックス杉並の会議室の利用がしにくい状態であるため、活用できるように区が積極的に動いてほしい。

- コミュニティふらっと東原には子どもたちがたくさん来ている、という話が出たが、元々児童館であったからといって、簡単に集まってくれたわけではない。子どもが定着するのは事業者やボランティアの努力があつてのことである。

• 部屋の定員はどうやって決めているのか。

⇒事務局：部屋の広さ、椅子・机を置いた場合の利用可能人数で考えている。

• ラウンジにミニキッチンがあるが、何か作ったものを食べられるのか。

⇒事務局：料理するほどの機能はない。水道とケトルを使えるスペースがある程度である。

• 委員から「学習支援については専門職に任せるべきと言われた」という発言があったが、それはボランティアだけでは限界があるため、ボランティア頼みにするのではなく、行政の方で予算をつけて専門職を配置すべきである、という話だったと思う。

また、「天沼には富裕層が多いから支援は不要と言われた」という話も、利用のターゲットを絞るためにしっかりと調査すべき、という話をしたと記憶している。

• 閉館してからも施設の状況を確認している。工事が遅れているように感じるが、7月末竣工は間に合うか。

⇒事務局：工事について大きな遅れはない。

5. 今後のスケジュールについて
事務局から資料を基に説明

6. 閉会のあいさつ
地域施設担当課長より挨拶